相模経済新聞　2018年4月10日号

宇宙生命哲学 ことはじめ

北里環境科学センター理事長／宇宙生命哲学者
伊藤 俊洋

1

先ず宇宙について

宇宙というと、先ず夜空の奥に見える大宇宙が頭に浮かぶ。宇宙物理学者の頭脳の中では、大宇宙の外側に超宇宙が存在し、さらにその外側には超超宇宙が存在するという。このような世界を考えることができる人間の頭脳の中の宇宙が最もスケールの大きな宇宙であると言えるだろう。地球上の70億の人間は、それぞれが心の中に独自の宇宙を持ち、その宇宙を拠り所に、人生の経験を積んでゆく。

心の中に宇宙を持っているのは、人類ばかりではない。哺乳類、鳥類、魚類、昆虫類など、我々が目を見張る社会性や親子愛を示す例があり、これらの生物種の心にも多彩な宇宙が存在すると考えられる。動物のみならず、植物や微生物にも、その体内に想像を超える豊かな宇宙が存在する。さらに、人類が構築して来た文明社会にも様々な宇宙が存在する。例えば、芸術、スポーツ、政治、経済、宗教の世界にも精神性の高い宇宙が存在する。これらの文明社会も人類が創り出した生命現象の一つと考えるなら、地球上は、いわば多種多様な宇宙の坩堝（るつぼ）と考えることができる。この無数の宇宙が互いに刺激しあい、絡み合いながら豊かな生命世界を構築している。

この豊かな生命世界を、宇宙空間から眺めたらどのように見えるだろうか。地球上の生命現象は、基本的に地上、海中、空中に限られる。深海の水深は1万メートルを超えるところもあり、その厳しい環境にも豊かな生物の世界がある。ヒマラヤを越えてゆく渡り鳥も観測されおり、高度1万メートルの環境も生命世界と考えられる。地球上の生命世界を、海面から上下1万メートルの環境と考えると、それは地球全体に比べてどの程度の体積になるのだろうか。実際の地球の直径は約12756キロメートルなので、仮に地球を直径4センチメートルの球と考えると、2万メートル幅の生命世界は0・06ミリメートルの太さの線で示される（図）。生物が生きてゆくためには、この他に太陽エネルギー、オゾン層、電離層、さらに月の存在も重要である。この細々とした消え入りそうな空間が、地球上のすべての生物にとって究極の生命宇宙と考える事ができる。

地球上の肥沃な土壌1グラムの中には、1億から10億の微生物が生息している。原発放射能汚染地区では、数百万トンの土壌がフレコンバッグの中に詰められ、無数の罪もない宇宙が暗い牢獄に閉じ込められている。

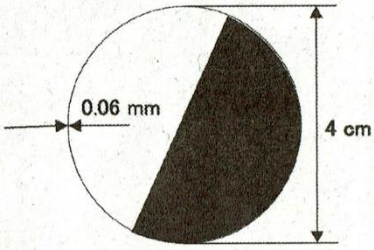

図　地球を直径4 cmとすると、生物の生息域は0.06 mm巾の線の中にある